

2022（令和4）年度市政懇談会 開催結果概要

- 日 時 令和4年7月4日（月）午後6時00分～
- 会 場 大楽毛生活館 集会室
- 参加者 19人

〔市長より説明（別途資料参照）〕

○都心部のまちづくりについて

●意見交換

【参加者A】

北大通が衰退していったのは何が原因だと思いますか。それは駐車場が無いということです。それも有料駐車場ばかりで、料金を払わなければ買い物に行けないという現状です。その辺が間違っています。帯広市は、長崎屋のすぐ向かいの市の駐車場が無料です。釧路市の場合、市の税金で駐車場を作ったのに、その駐車場がなぜ有料なのか。郊外の大型商業施設には大きな駐車場があり、無料で車を止められます。そういうところで生活している市民が、高い駐車料金を払ってまで、わざわざ買い物に行かないです。今市民が何を望んでいるのか、その辺を全然捉えていないです。

そして今、市民が求めているのは津波対策です。今、鉄道高架で約200億のお金をかけるなら、まずは津波対策をするべきです。そして、JRの経営状態を見ないで、なぜ鉄道高架にするのですか。鉄道高架よりも鉄道を外すことが先決です。まず鉄道を外して、自動車道路をどんどん増設するべきです。まずはいち早く安全対策をするべきです。個人的な考えですが、建物を建てることはやめて欲しい。建物は必ず風化するし、風化したらまた建て替えなければならなりません。安土桃山時代でさえ、30mの山を作っています。まずはこの近くに30mの山を作るべきです。たくさん空き地があるのですから。そして四方八方どこからでも車が上られるように道路も作ればいい。この山は、夏は緑地公園、冬は子どもたちのスキー場という作りにするのです。

【市長】

考え方のところで、しっかり議論することは重要だと考えています。今の話も車社会についてのご意見ですが、もちろん車は必要であることは重々認識しています。しかし、釧路市だけでなく、全国的にどこの自治体も中心地が衰退してきている状況となっています。一方で、やはり人は交流していくことが重要です。交流により、相手を見ながら、自分も確認することができます。こういう環境が、そしてこういう環境を作っていくことが、生き活きと暮らしていくかたちに繋がっていると思っています。我々がまちづくりを行っていく上で大事なことは、これから先、どんなかたちになっていくの

かをわかりやすく示していくことだと思っています。まだ生まれていない子どもたちにとっても、この釧路は故郷になるわけですので、今年で市制100年を迎えた釧路市で、開拓や発展のために頑張ってきた先人たちの思いを継ぎつつ、中核都市の釧路市として、もっと勢いのあるところを目指して、常に考えていかななくてはならないと考えています。

その上で津波の防災対策ということに関しましては、もちろん、しっかりと進めていかななくてはならないと考えており、毎年、説明をさせていただいているところであります。周知のとおり、日本全体が津波もしくは地震の災害リスクにさらされているところではあります。今後もしっかりとした知見というものをベースに、本市としての対応を進めていくということが重要だと考えています。

【参加者A】

私の言い方が悪かったのかもしれませんが、今、鉄道高架という話が出ています。この鉄道高架というものは必要なのですか。今の状態で、鉄道自身の使命感はもう終わっています。

【市長】

鉄道について一貫して言っていることですが、鉄道の議論を民間の議論でやっていいわけがないというのがまず第一です。鉄道の事業モデルについては、私鉄などを見たらわかりやすいと思うのですが、100～120kmの状況の中で鉄道を敷いて、周りの土地の開発をしながら駅を作り、収益を上げるということです。収益の観点から言うと15～20%が鉄道収入で、残りがその他収入ということが、鉄道の世界の事業モデルとなっており、日本も同じです。日本の場合は国鉄から分社化され、現在鉄道収入が一番低いのがJR四国、その次に低いのがJR北海道です。鉄道収入が一番高いのがJR東海の80%であり、80%の事業収入に頼っている状況は、実はとても危ない状況になっているということが事業モデルという意味では言えることになります。

【参加者A】

新幹線はもう赤字になっているという話ですが。

【市長】

釧網線は160kmあります。しかも自然の中を通っていて、開発モデルなんかできません。つまりは、日本の国土の中で鉄路というものは、昭和62年の民営化の中で残っているところについては、やはり残していかなければなりません。鉄路、空路、陸路、海路を活かしていく手法が重要だと考えています。その中でも、鉄路というものは極めて重要であると考えています。

【参加者A】

やはり（鉄路を）廃止する気はないということですね。

【市長】

鉄路は絶対に残すべきと考えています。

【参加者A】

自動車道が開通した暁には、鉄道の収入は半分になるのですよ。

【市長】

あらためて我々のまちづくりということについてですが、鉄道高架をしていながら、下に二つの道路を作り、そこでしっかりと安全性を確保する。このことが、先ほども申しましたとおり、大事なことだと考えています。

【参加者B】

参加者Aが言われた北大通が衰退していったことに加え、人口減少、日本製紙の事業撤退など、なぜ釧路がこんな状況になったのか、その分析をしっかりと行い、その上で今後のあるべき姿を示してもらいたい。

一方で、先ほど市長が述べた車中心ではなく、人と公共交通中心のまちづくりをしたいということについては賛成です。市民のことを考え、市民が幸せになれる社会を築いていくことは市長の責任です。市民からの意見をしっかりと聴いて、それを吸収して、新しい案に加えてくようお願いしたい。

また、街路灯の電気料のことについて、同じ町内でも払う人と払わない人が隣り合わせにいる現状があります。いくら市長や市が「住みよいまちづくり」や「両隣仲良くしましょう」と言ったところで、この感情的な溝は埋まりません。それは公平ではないからです。この不公平感がどれだけ町内会活動を阻害しているのかについても考えてもらいたい。

あと、街路灯の管理の継続が限界です。できれば補助率を上げて、10割にさせていただきたい。

それから町内会の会員の高齢化が著しい上に後継者もない状況です。これらを早く解決してもらいたい。

【市民環境部長】

今、様々なご意見を頂戴した内容については、この地域に限ったことではなく、釧路市全体の問題であり、防犯灯の維持というより、町内会の維持ということになるかと思えます。町内会の加入率も半分以上を切っており、役員のなり手がいない、役員が高齢化しているという現状についても十分認識しています。しかしながら、これといった抜本的な対策がなかなか無く、その辺は市も大変苦しいところではありますが、連合町内会とは連携しながら進めている状況です。

防犯灯の維持管理費を負担している人といない人がいるということも把握しています。町内会によっては、町内会に加入せずとも防犯灯の維持費だけは払ってもらっているというように工夫している町内会もあります。そのような工夫している事例を紹介したりすることは可能です。また、町内会の皆様にはいろいろ工夫をしながら進めていって欲しいと思っております。これからも、一つ一つ知恵を出しながら、連合町内会とも協働しながら進めていきます。

【参加者C】

私は駅裏で生まれ育ち、自分が生まれた年に釧路駅ができ、小学校低学年の時に旭小学校ができ、中学校の時に今の北中のほうの跨線橋ができたというふうに時代をずっと見てきました。車社会の中で、当時は50年後にこうなっているとは誰もイメージできてなかったと思います。昔は地下道ができ、ステーションデパートがあり、駅前に賑わいがあり、駅裏にも賑わいがありました。時代背景の中で、ペーパーレスになり、ネット社会になり、便利にはなったけれど個が尊重される世界となり、今や町内会活動にも苦勞するところが多々あります。市長が高架の話をしました。50年後にはどうなっているのでしょうか。

さて、一つ一つの金額のことを言うと、また問題が起きると思いますが、ぜひ、もっと市民にわかりやすいかたちで、メインの大きな道路だけではなく、もっとこういう細い道路も作ろうとしているとか、市民からのいろんな意見を聞いて、かたちを作ってもらえればと思います。

町内会の維持・存続についても入ってくれる人、入らない人がいる。やはり不平不満もあります。

市の理事者、市長をはじめ、理事者の人たちは大変かと思いますが、市の計画等をもっと市民の皆さんに知らせていただき、発信をお願いしたいと思います。産業のことについても、釧路にある産業でもっと伸ばせる場所はあると思います。蝦名市長、こんな産業を引っ張りたいとか、こんなふうにしたいというものがありませんでしたら、どんどん市民に発信してもらえればと思います。

【市長】

町内会の件では、大変なかたちの中で、皆さまにはご面倒をかけていると思っています。町内会にみんな入ってもらえるよう、13年間、ずっと話をしているものの、なかなか成果が上がらないという状況で、非常に切ない思いもしているところであります。昔はみんなが町内会に入るものだというふうに捉えていたものですが、第二次世界大戦が契機となり、町内会というものは、その他の団体と一緒にのものであり、特別視はしない、入るも入らなくても自由ですと国が決定してしまったが故に、現在のこのようなかたちになった経緯があり、本当に困ってしまったという思いをしているところであります。やはり市民一人ひとりが、できるだけご意見・要望等を、町内会を通しながらお伝えいただければと考えています。町内会から届いているものは、行政体としてはまずは最優先で対応しています。そして、このことを私も言い続けていかなければと考えていますので、引き続きよろしくお願ひします。

人口減少については、道内の主要な都市においても生じているところであります。減少し始めた時期や減少ペースはその都市の産業構造等が関係し

ており、釧路市の場合は水産の特性からか、急激に上がって、急激に下がるということが、かたちとして出ています。また、産業、つまり働くところをしっかりと確保していくことが、人口減少を抑えることにもつながることから、産業政策についても、まちづくり基本構想をベースに置きながら、進めているところでもあります。引き続き、まちづくりの方向性など、考えていることをお伝えし、市民の声にもしっかりと耳を傾け、議論すべき時はしっかりと議論して進めていければと考えています。

【参加者D】

企業誘致について、お聞きします。日本製紙も撤退し、明らかに人口が減少しています。今、人づくりから始めるという話ですが、人口が増えれば活気は戻るはずだと私も思います。しかし、人口を増やすためには働くところが無ければ、どれだけ議論したって意味がありません。企業誘致についてどのようにお考えになっていますか。

【市長】

企業誘致については釧路市も進めてきています。大きなかたちの成果が昔であればありましたが、最近はなかなかそういった成果が出てきていません。理由としましては、例えば企業側も昔は工場を建てれば30年、40年は維持できていましたが、製造業の中には、世界を相手にしているからか、何百億円をかけて建てた工場を2年で潰したりする事例などもあり驚いています。このような現実を踏まえた中で、だから企業誘致をしないということではなく、いろいろなところにアプローチをかけていこうという動きをしています。

また、地元にある会社にも着目し、釧路ビジネスサポートセンターk-Bizを開設し、タッグを組みながら進めているところでもあります。現在、k-Bizでは、地元の企業に儲けてもらい、そこで雇用を増やしてもらうような仕組みづくりを行っており、今年の3月の段階では、k-Bizのサポートを受け、売り上げを伸ばした企業から、少なくとも57名の雇用が成果として上がっているところでもあります。そして、現在も、この取組については継続して行っています。

【参加者E】

何年か前にも駅の高架化の説明会に参加しました。その時には、補助金をもらっても85億という数字が出ていた記憶があります。その時は、計画通りにはなかなか上手くいかない、何年か棚上げしましょうということになったと思いますが、今日の説明を聞いたら、鉄道高架を基本とする都心部まちづくりにかかる市の想定負担額が56億でした。この数字の中には跨線橋に関する予算も入っているのでしょうか。

【副市長】

平面交差になるため、跨線橋に関する予算は入っておりません。

【参加者E】

了解しました。また、どなたかの話の中にもあったが、うちの町内でも高齢化が顕著であります。独自の調査結果では、高齢化率が62.4%でした。そして、大楽毛地区は大体似通っており、圧倒的に65歳以上の人口が多い現状となっています。

さて、賑わいということについてですが、以前香港を訪問した際、道路にたくさん車が駐車していました。かつて北大通の片側を無料駐車場にしたかどうかと提案したことがありますが、国道だから駄目だと言われました。釧路市の観光については、幣舞橋と夕日は全国に響いており、和商市場の勝手井も知られているが、それ以外、あまり見るところがありません。駅前通りや北大通など、駅前の賑わいづくりというのは、やはり進めないとも夢も希望もありません。当初、私は疑問をもっていました。説明を聞いて考えが少し変わりました。どういう予算の組み立てになるかはわかりませんが、釧路はやはり北大通を中心としたまちづくりを考えていかないと、夢も希望もない釧路のまちになってしまうので、市民の皆さんにも理解してもらえるような努力を続けていただき、進めることで、夢を持つ北大通、釧路のまちということにつなげて欲しいと思います。

また、大楽毛地区については、高齢者ばかりなので、バスのルートについても少し考え直していただきたいと思います。

【市長】

たしかに高齢化率が上がっています。先に発展した地域では高齢化が進み、若い人たちがなかなか入ってこない現状があります。釧路で言うと、昭和50年代初めにできた美原団地が該当するかと思います。そして東京では高島平。若い世代が住み始め、小学校ができる。しかしそこで住んでいると当然のように皆歳を取り、小学校が無くなり、高齢化が進んでいきます。本来であれば多様な世代の方々が地域の中に入っていける仕組みが重要なのですが、市営住宅などを作っていく過程で年齢層では選べず、所得等で選んでいくかたちとなり、そういった意味ではまちづくりとこの仕組みというのがなかなかマッチングしてこないというのが現実としてあります。現在では、昭和地域において若い世代が入ってきており、昭和小学校の児童が一番多い。しかし、ここも30年経ったらどうなるのかと考えますと、今我々は次の対策、同じ失敗を繰り返さないようにしっかり考えていかなければならないと感じています。また、市の考え方を市民にしっかり伝えていくことも重要だと考えています。

バスのことについては、私はしっかり利活用していくかたちを取りたいと思っています。従来はバス会社の路線決定についての過程に我々行政は入っていませんでしたが、今は市役所も入りながら一緒に議論していますので、市民の声も反映しながら進めていきたいと思っています。我々は公共交通を充実させていきたいと考えており、また、バスの路線も使いやすくなるよう

一生懸命取り組んでいるところです。

【参加者A】

1点目は、釧路市の方向と帯広市の方向が少し違うような気がします。帯広市は市民の立場になって市政を考えてくれているようですが、釧路市は少なくとも駐車場だけ考えても、まるっきり市民のためには提供していません。その辺をもう一度市長に、市民が何をどのように求めているのかをしっかりと把握し、市民にとっての住みよいマチとするために、市民の立場になって物事を進めて欲しいです。

2点目は津波対策のハザードマップには大楽毛中学校の4.4m、ここが逃げる場所に指定されています。ところが、大楽毛地区に来る津波は10mくらいと言われています。町内会でも10m以上の津波が来ますよといった情報を流しています。そういうことを考えると、大楽毛地区だけでも津波、大津波が来た場合はどこへ逃げるのか、それを市のほうでしっかりと示していただきたい。

【副市長】

平成24年に北海道が津波のシミュレーションを出していましたが、今年の3月、北海道が新たに津波シミュレーションを出し、基準水位というものも出しています。これによると大楽毛地区は、大楽毛中学校で津波高が6.5mで前回よりも下がっています。そして大楽毛小学校では7.2mに下がっています。今までは中学校の屋上だけでしたが、今回の変更により今度は校舎の3階が使えるようになりました。また、大楽毛小学校についても屋上が使えます。これらの他にはポリテクセンターや民間の老健施設が避難可能な施設になっています。現在、市ではこのような施設について、再度シミュレーションを行っており、例えば大楽毛小学校の屋上を活かすとすれば、手すりを付けなければいけない、外部階段を設置しなければいけない等の検討をしています。民間の施設に対しては、有事の際に避難施設として使わせてくれませんかと話しているところであります。

【参加者A】

福島を事故を考えたら、福島では最初6.5mの津波高想定でした。しかし実際には17mの津波が来ています。

【市長】

津波の基準水位というのは、ぶつかって、せり上がった高さまでを基準水位というものであり、その基準水位以上に行くことは無いと考えています。併せて、想定される最大値の数値の時間軸については、昔は500年ということでありましたが、今は1000年から6000年の時間軸の中で考えられる最大の津波というふうに国のほうでは発表しており、我々はここのところをしっかりと抛り所としながら、対策を講じていきたいと考えています。

また、釧路と帯広の方向ということについては、私は、基本的に自治体は

そんなに変わっているものではないと思っています。もちろん、様々な方が、様々な思いがありながら、いろんなご意見をいただくことは本当に大事なことだと思っています。その上で、無料と有料ということについては、社会全体にとって、どちらがいいのかということのを常に考えていかなければいけないということが我々の使命でもあり、そのことをしっかり話していくのも、我々の務めだというふうに思っています。今までのマチの歴史を踏まえつつ、将来もしっかり見据えつつ、次の世代の人たちのことも考えながら、まちづくりを行っていくことが重要だと考えています。